

行動障害部会での議論と課題

学齡期から成人期への移行の取り組み

大津市における行動障害の方の課題

① 生活の場の確保

- 大津市内に行動障害を呈する方の生活できる場は市内1カ所しかなかない入所施設と行動障害の方にも対応したグループホーム1カ所しかなかく、入りたくても入れない。ロングショートで対応している方もしなければ、県外の施設に行く方も多い。

② 日中の場の確保と支援の在り方

- 行動障害を呈する方を受け入れられる事業所が限られている。また、本人の特性やニーズに対応するための人員体制の確保やスキルアップ、環境面の整備等が十分にできない現状。

③ ヘルプの質量の確保

- 行動障害を呈する方に対応できる事業所が限られている。ヘルパーの確保と育成が困難。また、本人が余暇で過ごす拠点の確保や車両を利用して送迎できる事業所が少ないことも課題。

大津市における行動障害の方の課題

④ 短期入所の確保

- ・大津市内に行動障害を呈する方の利用できるショートステイは2か所。職員体制や他の利用者との関係等で利用回数等に他の方より制限がある。

⑤ 医療体制

- ・行動障害を呈する方を診察してくれる医師の確保。
- ・入院時の付き添いを求められることが多い。そのため、治療が十分にできないことがある。
- ・医療になかなかかかることができずに、病気が重篤化することがある。

行動障害部会の概要

①目的

行動障害児者が当たり前気持ちよく地域で暮らすためのネットワークの構築と支援者のスキルアップの向上

②実施回数など

- 2か月に1回、2時間半程度

③参加者

- 10～20人程度／回。
- 日中支援事業所（生活介護事業所中心）、相談支援事業所、入所など住まいの事業所、学校、など。

成人期の移行に向けた取り組み

- 部会で障害児施設に本人の様子を見学に行き、成人期以降も見据えて必要な支援やソーシャルワークを部会内で検討した。実際に支援の現場で取り組んでもらい、その評価を再度部会で行うことを積み重ねる中で状況が改善。検討した内容は、毎回障害児施設担当者が持ち帰り支援に活かした。また、部会でケース共有をすることで市内の関係者が本人のことを身近に感じることができるようになる。
- 卒業後の進路に関しては部会にも参加していた生活介護と重度の方向けの共同生活援助事業所を利用することになる。部会で事例検討をしていたことで移行がスムーズに行われた。

事例①

* 概要

- 最重度知的障害、自閉症
- 好きなこと：水遊び、指弾きなどの感覚遊び、ホールをスキップして回ること。
- 苦手なこと：予定が分からず不安な状態、細かなことで決まった通りになっていないこと（トイレの便座があがっているなど）。そうしたことでイライラ時、不安時には壁への頭突きがみられることもある。

* 検討した内容と結果

- 頼りにするものを探し求めて、人を指標にして動こうとすることがしばしばみられていた。そうした際には、その指標にしている人が不安定になると一緒になって不安定になったり、なかなか切り替えのできない場面もみられた。また、余暇時間の活動のなさが課題として挙がっていた。それらに対して、以下のようなことが考えられた。

①場面の切り替え時に、人を頼りにして動いているところが大きい。

→タオルを使って入浴のサインを伝えた。タオルを提示し続けることで、人ではなく、タオルを手掛かりに入浴できるようになった。

②余暇時間を持て余していた。

→本児の興味のあるような余暇グッズを提供し、それらは自室で遊ぶように教えることで、落ち着いて自室で過ごせることもできるようになってきた。

事例②

* 概況

- 最重度知的障害、自閉症
- 好きなこと：部屋や廊下の隅にいて、壁や気になる物を、指先でトントンと叩きながら過ごすこと、散歩、ドライブなど乗り物に乗ること、音楽を聴くこと。
- 苦手なこと：大きな音や声、過剰な指示や声掛け。指で両耳を押さえ、「ウー」と大きな声を出したり、泣いて飛び跳ね、壁を叩くなどして不快な気持ちを表す。

* 検討した内容

- 非常に興奮が高く落ち着きがなく、職員の指示が入らない、支援に対する拒否が強いという点が多くみられていた。それらに対して、以下のようなことが考えられた。

①本児に対して支援者が求めることのレベルが高いこと。

→こちらからの要求のレベルを下げた（例えば、学校の用意の片づけは、細かく分類しなくてもカバンから出すだけでOKなど）。

②過剰な支援が入りすぎていること。

→強引な促しや不必要な身体接触を少なくするなど、必要以上に関わることなく簡単な言葉での指示を心がけるようにした。本児が気持ちよく、自分から動けるような環境設定をした。

- トイレ、入浴、着替えなどの場面でみられていた支援の拒否がなくなった。

* 結果

- 拒否がなくなっただけでなく、トイレ、入浴、着替え、食事など、簡単な言葉掛けで自らスムーズに動けるようになった。
- 簡単な物運びなど、お手伝いにも取り組むことができ、できることが増えた。

行動障害部会の成果

- ケース共有が進むことで、関係機関の支援観・障害観等の共有ができた。同じ圏域で同じ利用者を支援する者が、互いにどういった考え方で支援しているかを細かく共有して学ぶことで、統一かつ安定した支援につながった。
- ケース共有を繰り返す中で、ケース把握をするために必要な項目が整理されて見えてきたので、部会用のフェイスシートを作成した。このシートを作るためのプロセスである意見交換自体が、支援観の共有にもつながった。